

# 銃持てば戦争ありうる



## ノーベル賞 赤崎さん

青色発光ダイオード（LED）の実現により昨年のノーベル物理学賞を受賞した赤崎勇・名城大学教授は6日、本紙のインタビューに応じ、空襲で九死に一生を得るなど自身の戦争体験を打ち明けながら、反戦への思いを語った。集団的自衛権の行使容認など、日本が守り続けてきた平和主義の在り方を変容させかねない安全保障関連法案について「絶対に反対です。歯止めが利かなくなる危険があります」と力を込めた。

赤崎さんは特攻隊の出撃拠点だった鹿児島県知覧町（現南九州市）の生まれ。鹿児島市に住んでいた旧制中学時代には、学徒動員で旋盤工として潜航艇の部品などを作っていた。一九四五年の鹿児島大空襲では実家が焼夷弾により全焼。焼け野原で機銃掃射を受けた経験などから反戦への思いは強く、「マンタ」ユーゴは、学問に励む時間を奪われたことを振り返り、「いかなる理由でも戦争はいけない」と語気を強めた。

### 「安保法案に絶対反対」

また、集団的自衛権の行使容認についても考えを語

り、「自衛に踏み込まれたら自衛するというのが、自衛隊の本来の在り方。専守防衛に徹するべきです」と強調した。「戦争は偶発的に起きる。銃を持っていれば、どこでもありうる。（海外での武力行使によって）日本も巻き込まれかねません」と懸念を示した。法案をめぐっては、ノーベル物理学賞の益川敏英・名古屋大素粒子宇宙起源研究機構長など大学教授らの有志が呼び掛け人となった「安全保障関連法案に反対する学者の会」が、法案の廃案を求めている。



戦時中の体験を語る名城大の赤崎勇教授。2日、名古屋市天白区で

## 学徒動員、空襲体験…自由奪った

一九四五年六月十七日夜、赤崎さんは聞き慣れない「サーン」という音に驚き、外を見た。えい光弾が周囲を明るく照らし出した。と思うと、この音とともに焼夷弾が降ってきた。「濃い緑色をしている焼夷弾が、畳二畳の広さに一個ほどの割合で落ちてくるんです」

以脇に、機銃掃射の弾が降り注いだ。赤崎さんは「やられた」と思いました。パイロットが操縦席から見下ろしているのが見えまじた。ゴグルをして、軍帽をかぶっていて、今でも脳裏から離れません」と振り返る。畑仕事をしていた母親が戦機に狙われたこともあるという。

学徒動員先の長崎県佐世保市から実家のあった鹿児島市へと一時帰省していた赤崎さんは、その夜はたまたま友人宅に滞在していた。室内にはすぐ火が回り、友人らとともに服や布をぬらしては、それをたたきつけるようにして消火に当たった。友人宅から二・五キロほど離れた実家では、両親は逃げて無事だったが、家は跡形もなくなっていた。

学徒動員で働いていた佐世保市の海軍工廠では、旋盤工として特殊潜航艇などの部品を作っていた。毎日の食事は「大豆の水煮が五、六個と、切り干し大根が少々入った木の箱の弁当。上官が白米を食い散らかしているのを目撃し、怒りが湧いた」ともあった。「中学二年まではパイロットを目指し軍国少年でしたが、佐世保での日々で軍への反感を持ち、考えが変わりました」と、研究者への道に進むうえで岐路の一つとなった記憶を語った。

その数日後、疎開先に向かって歩いていると、上空から爆音を上げて戦機が急降下してきた。とっさに路肩に伏せた赤崎さんの数

終戦の日、「敗戦と聞いても、非国民と言われるかもしれないが、全く悲しくなかった。ほっとしました」という。一番はしかったのは「明かり」。終戦後も物資不足の中で、夜になると魚油ランプの薄暗い光の下、友人から借りた本をむさぼり読んだ。「今の高校生に当たる時期、勉強や読書など自分の好きなことに打ち込める自由を戦争にすべて奪われました。不戦

あかさき・いさむ 京都大理学部を卒業し神戸工業（現富士通）に入社。1959年名古屋大工学部助手、その後助教授。松下電器産業（現パナソニック）を経て81年名大教授。92年名城大教授。91年中日文化賞、紫綬褒章、文化勲章などを受賞し、2014年日本学士院賞・恩賜賞、窒化ガリウムの結晶化に成功し、1989年に青色LEDを実現。天野浩・名古屋大教授（54）、中村修一・米カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授（61）とともに昨年のノーベル物理学賞を受賞した。名大特別教授。名古屋市西区在住。

は心からの願いです」